

「ぶんか」は親しみやすい文化の話題を発信します(毎月第1日曜日)

ぶんか

めぐる
アングル

OISTで人工知能美学芸術展

56

2017年(12月3日(日))

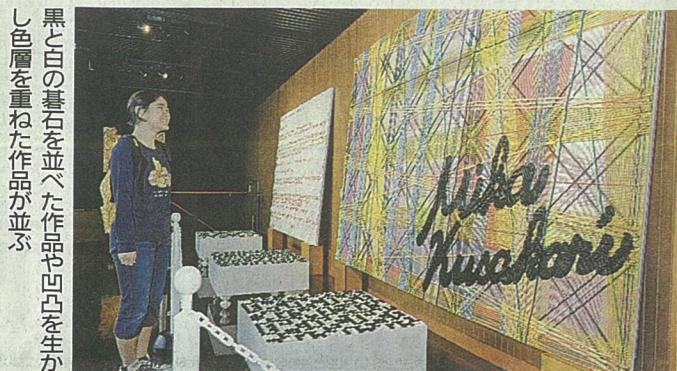
沖縄「OISTで人工知能美学芸術展」

人間とAIアート共演

藝術の概念 摆さぶる



色ごとに異なるひしゃくを認識し、子どもたちを追尾するスマホロボット=11月19日、恩納村・沖縄科学技術大学院大学



黒と白の碁石を並べた作品や凹凸を生み出す色層を重ねた作品が並ぶ

人工知能(AI)に美意識は芽生えるか。AIが自律的に芸術作品を作ることができるのか。AIの可能性から人間の知能に至るまで、知性を多角的に探る「人工知能美学芸術展」が、恩納村の沖縄科学技術大学院大学(OIST)で開かれている。森に広がる近未来的な建築物に展開された展覧会に足を運んだ。

「参加作家」は人間の美術家に加え、人間が自動生成ソフトなどを使ってAIと共に作した45組。美学を認識する主体と、制作者をそれぞれ人間と機械に分けて四つの分野に整理し、映像や平面に立体、インсталレーションなど多様な作品を展示している。

最初の建物に入ると、自動で膨大なグラフィックを作り、どれが人間の好みの作風か選んで投影しているコンピューターの作品が出迎えた。制作した創価大理工学部長でアーティストの畠見達夫さんによると、制作はすでに畠見さんの手を離れて、毎朝自動で更新され続けているという。

地下街のようなトンネルギャラリーを抜けると、アンドロイドになりきった人間のパフォーマンスの映像が再生されていた。「日本一のエーアイ」を名乗るコンピューターが生成した自伝めいた小説も展示されている。映画を再生するタブレット端末の上で粘菌(単細胞生物)が培養され、映像の光信号に反応して粘菌が動き、その動きで映像に変化を付けていくという作品も上映されていた。

人間と機械のどちらが作ったのか、そもそも芸術か、はたまた研究か。さまざまな概念が揺さぶられていく。

会場を巡るうち、色彩鮮やかで、なめらかな線描の筆致の絵画の作品群が目に留まった。温かみがあるなど感じてキャプションを見ると、作家は何とチンパンジーとボノボの「6人」。向かいに展示された人間の画家の作品と雰囲気が似通っていて、何とも複雑な気持ちがよぎった。

その絵を描いたのは玉川大学脳科学研究所の客員教授の塚田稔さん。塚田さんは会期中6回ある最初のシンポジウム「AI美学と芸術」にも登壇した。



左)チンパンジーとボノボが描いたなめらかなタッチの絵画に見る鑑賞者

右)人間が演奏できない曲を、オルゴールのような原理で実演する自動演奏ピアノ

かうかしていられない」

展覧会の沖縄開催は開学前の2004年からOISTで先行的研究事業に参加している神経計算ユニット教授の銅谷賢治さんが、東京の研究会で知り合った中ザワさんと意気投合し一気に実現した。

ロボット自身が行動目標を見つけることが可能かどうか研究し、スマホロボット開発チームを掛けている銅谷さん。「ロボットの研究と脳の学習の仕組みと、芸術家たちが美とは何かを求める作業に似たところがあると気付いた」と目を輝かせる。

会期は来年1月8日まで。詳細はウェブサイト、<https://groups.oist.jp/ja/aiaae>で確認できる。

(文・吉田伸、写真・古謝克公)

「文化」が生まれるところ、交わるところ、裏舞台をさまざまな角度から取材し、文章と写真で紹介します。